

# イランさまざま

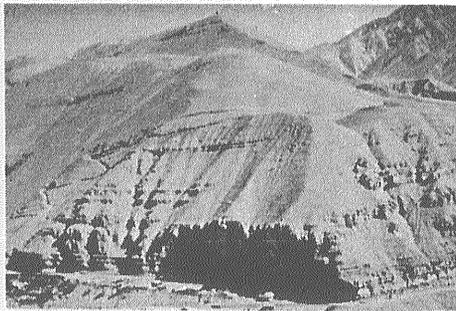
## カラチ・ダム

金子 徹 一

このダムは テヘランの西方約40kmの所にある。  
1日大使館の川村書記官の案内でここにドライブした。  
郊外に出るとすぐ砂漠で ところどころに放牧の羊が見られる。  
カラチの町から北に山にはいるのであるが  
その谷にはわずかな水が流れ 水路にそって樹木がみら

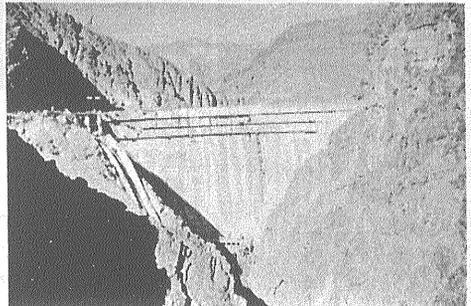
れる。 その日は休日で(イランの休日は金曜日である)テヘランの人々がこのこかげに自動車で乗りつけ一家団らん中である。 われわれ日本人から見ると清流でもないし 樹もまばらで葉は砂ぼこりで日にやけていて 何も遠くテヘランの街からくるほどの所とも思えないが それは水や樹木に対する感覚の相違であろうか。

やがてダムに着く。 ダムはほとんど完成しており 周囲の不用になった設備などを取り片づけていた。 その高さ 180m で背後にすでに1/3ぐらい貯水されていた。 発電所は目下建設中で 日立製の発電機が用いられており 最大ピークの能力は 11,000 kW とのことである。 しかし このダムの目的は 発電よりも膨張するテヘラン市の給水がおもだそうである。



←  
付近の地層は白亜紀だそうだが見た目にはやわらかいようである  
地層は整然としてみごとである ダム付近だけは花崗岩(?)でよい基盤のためこの地点が選ばれたのだと聞いた

←  
花崗岩の付近では地層が急にめくれ上がるように傾斜が急になる



→  
カラチ・ダム  
アメリカの業者により1956年から工事が始められた

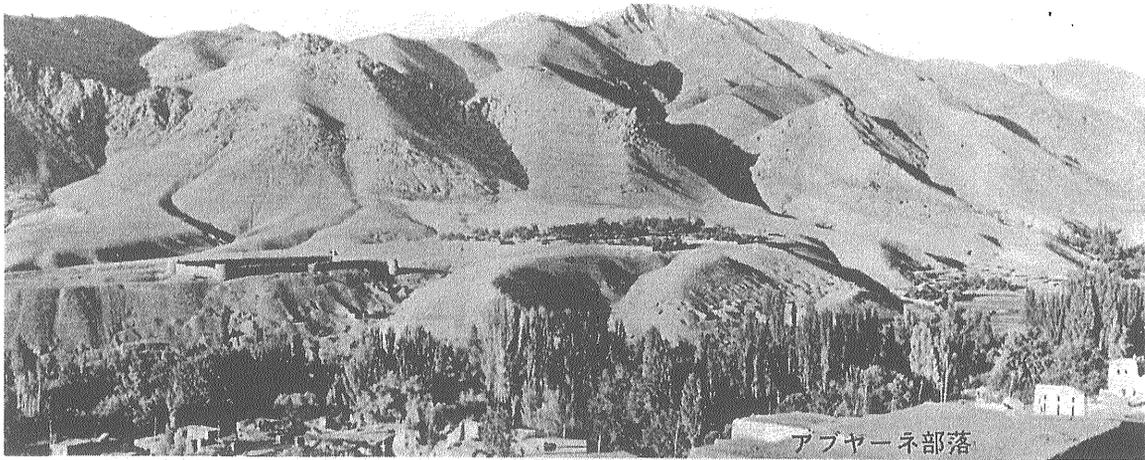
## アブヤーネ部落

おかしなことから私はアブヤーネの部落に一夜泊ることになった。 ここは私を案内してくれたラジャー氏(最近カナダから帰った地質学者)の故郷である。

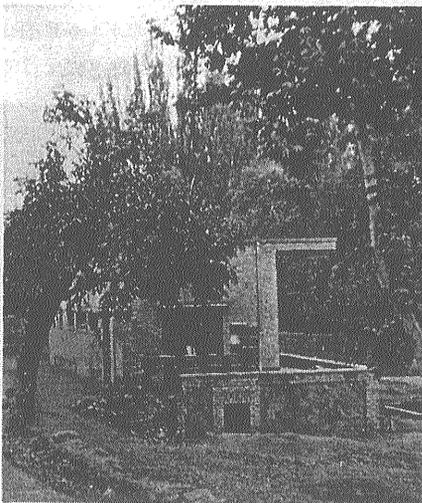
テヘランから南に国道を 130 km ゆくと グムというお寺の町につく。 ここから西の道は本道でイソハンに行くが東の道は 裏街道になりジュータンの産地のカーションを通り 大砂漠の西端に沿いながら南下している。 目的地であるタルマシ鉱山は この道からさらに東の砂漠を約 120 km の所にある。 この行程は自動車で1日では無理なので何処か1泊しなければならないのであるが ラジャー氏の妹さんたちをアブヤーネ部落に送ったためここにそのまま1泊することになった。 この部落

は上記の東の道から分かれて 砂漠と反対に西の山にはいり 約1時間谷に沿った道をゆくと着く。

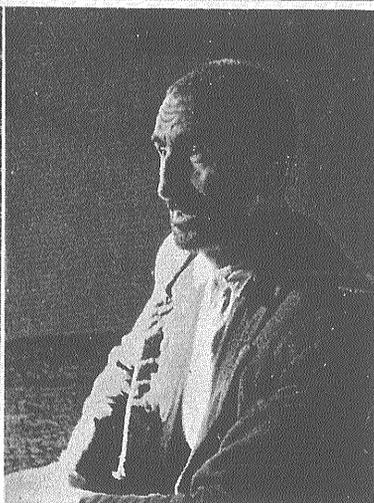
村は西から東に流れる川に沿って水の灌漑できる高さまで畑と果樹園がある。 家は土で固めたもので 大部分は貧しいが 山寄りに立派なモスクと医院がある。 驚いたことに小さな発電所があり ジーゼルエンジンの発電機が日が暮れると共に動き出し 部落の家々の灯をともしている。 ホテルはもちろんないのでラジャー氏の弟の家にとめてもらった イラン料理のご馳走が終ってお茶が出る頃 親類の長老連中が集ってきて ラジャー氏と私を囲んで色々話をした。 ラジャー氏はテヘランで育ち 学校にも行ったそうだが それでも郷土の名士であることは間違いない。 彼がいう1つ1つが新しい外界の知識であり当分はこの部落の話題であったろう。 翌朝 親戚一同総出の見送りをうけこの村を出発した。



アブヤーネ部落



発電所

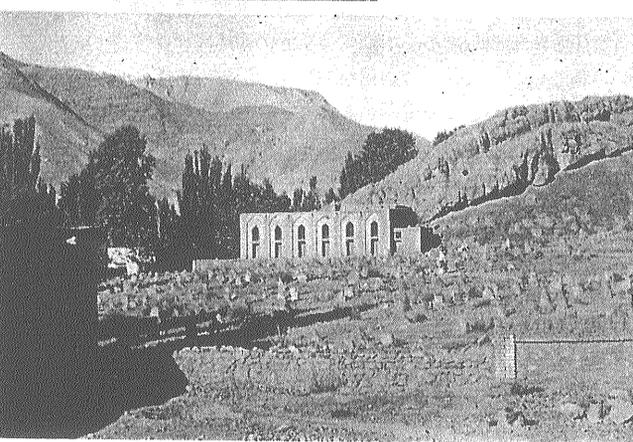


村の長老

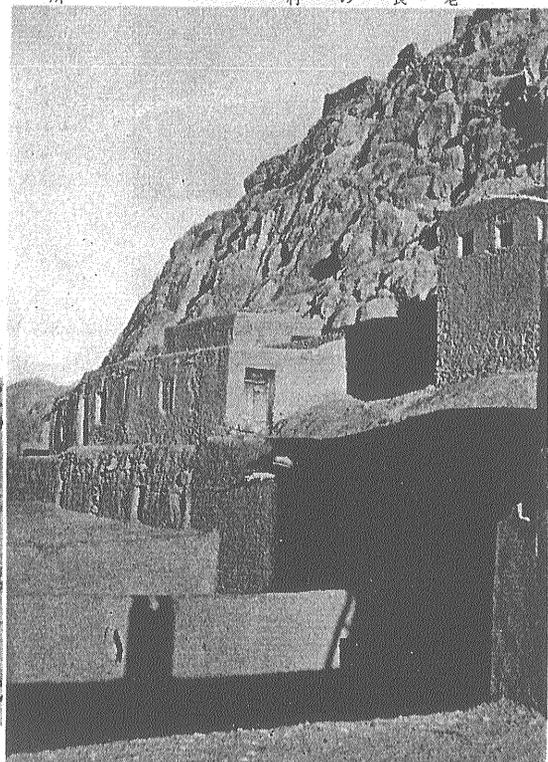
←

農婦

カゴの果実はりんごで  
4~5コ取り出して食べて  
行けといった この  
辺の婦人はチャドール  
を使用していない



前方の建物はモスク(寺院) 都市で見るとようなドームや塔がない 前の庭にはたくさんのお墓がみえる



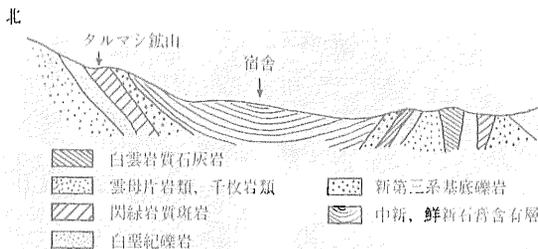
山の斜面にそって家が建てられている 屋根のハりは木材を使用している

# タルマシ 鉱山

テヘランの東南 直線距離にして約 350 km の砂漠の中の銅 ニッケル コバルトの鉱山である。高級ジュエータンの産地のナインの町から東に広大な砂漠の中をジープで飛ばすこと 2 時間 こつぜんとして山脈が現われる所がアナックの町である。この付近は鉱床地帯で銅 鉛 亜鉛 ニッケルなどの鉱山が散在する。タルマシ鉱山はここから約 30 分ぐらいの行程である。

この付近の地質は古生代 白亜紀 第三紀の地層で鉱床は新第三紀の砂礫岩と白亜紀の砂礫岩の境界に沿って侵入した閃緑斑岩のダイクの中に脈状に胚胎しているものである。この鉱山はこの大戦の前にドイツ人によって発見され操業して上部のよい所は掘りつくされており現在は下部と残鉱をとっている状態であるが 昨年この鉱山でウラニウムが発見されたので 私の行った時は 2 回目の調査を実施していた。調査法は携帯用のガイガー計数器で坑道を 2 m 毎に測定し 高い所でサンプルをとっていた。

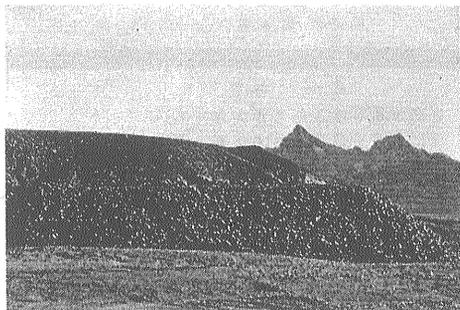
テヘランの兵器工場に銅を供給するために 現在イランの銅山は全部陸軍の経営になっている。この鉱山も



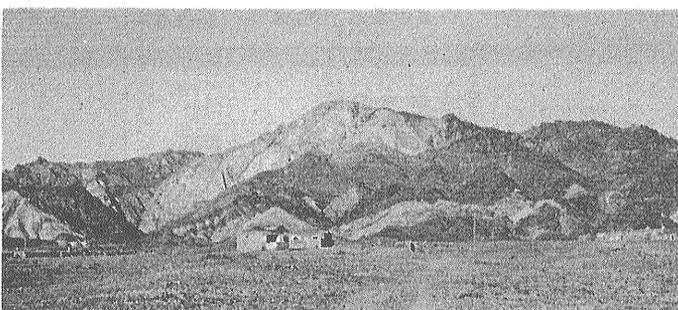
第 1 図 タルマシ 鉱山地質略図

鉱山長は中尉さんで 鉱石を月に大体 20~30 トン テヘランの精錬所に出している。しかし この中かなりウランの富鉱が含まれているので 私が調査担当のアメラニー氏に注意したところ 彼もそう思うが鉱山の担当が陸軍であるのでどうにもならないようである。

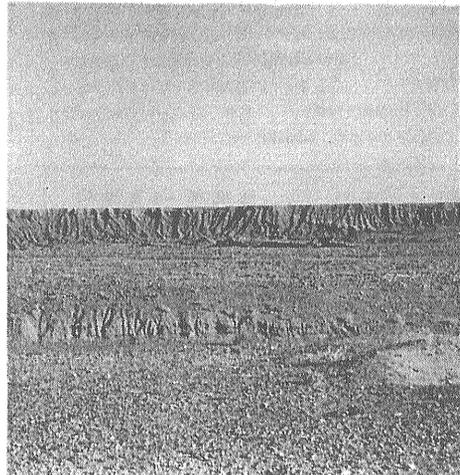
ウラン鉱は黒色のピッチブレンドで坑内の富鉱部ではバック・グランドが 30 カウントの GM 管で 2,000 カウント以上になり品位は 10% 以上にもなるようである。(鉱石標本持ち帰ってきたので分析中)しかし 上記のように上部は掘りつくされているので 鉱量はあまり期待されない。宿は鉱山のクラブで 食堂を含めて 4 部屋ぐらいある。調査隊は採鉱 地質各 1 名 測量 2 名 自動車の運転手 2 名から編成されている。前の 2 名はフランスに留学した 30 歳前後の元気のよい若者で 鉱工業省で同じ部屋にいた人たちだから気やすく 食事のときなどは雑談に花が咲いた。(筆者は物理探査部 探査課長)



むかし反射炉で精錬が行なわれていたそのカラミ捨て場  
この中にウランが相当含まれている



宿舎から北の鉱床を見たもの 赤い砂礫岩や白黄色の石膏含有層が 地質により色が異なるので 速くから地質の説明を聞いてもよく判る



宿舎の東側にみごとな何何構造がみえる



帰るとき全員で見送ってくれた みんな良い人ばかりで前の晩 話にきた村の小学校の校長さんと (といっても 20 歳ぐらい) まで わざわざ見送りにきてくれたのには恐縮した